

「雑職性」

大学情報サービス室 橋本

タイトルは「雑職性」であり、「雑食性」のミスプリントではありません。まあ似たようなところもありますが。

私は、三年前に広島大学に移ってくるまでの二十五年近くの職業生活の中で、商社に一年、シンガポールに三年、民間企業六社などの出向者で構成される財団に二年のほか、地方行政において、保健所勤務や交通安全、新空港立地計画（本郷にあるあれです）、人事・労務、産業振興、国際協力、地域医療（救急医療やへき地、障害者医療など）といった仕事を経験してきました。

良く言えば幅広い、率直に言えば雑多な経験です。

（山形からパラグアイまで）

全国初の公務員の商社派遣では、自分の仕事は自分で作れということで、山形から鹿児島までセールスをして回りましたし、シンガポールでは商工会議所と行政が共同で設置した経済事務所の初代所長として、自分のビザを自分で取るところから始めました。

非常事態宣言の出されたバンコクで、軍の装甲車が道路を一車線に規制している中をタクシーに乗って一人で工場回りをしていたこともありますし、フィリピンのごみの山の上に生まれたスラムの光景に立ちすくんだこともあります。

国際協力では、ペルーの日本大使公邸人質事件の数ヶ月前に同じ場所で青木大使と同じテーブルを囲んでいたたり、パラグアイの山中で車が故障して途方に促していた時に護身用の拳銃を積んだ日系人の車が通りかかって助けられたこともありました。海外に移住した方々の苦労話とその生活の実情も忘れられません。

地域医療では、痴呆病棟や特別養護老人ホーム、高齢者が寝たきりの高齢者を十数年にわたり介護している家庭などを訪問し、へき地の診療所を守る医師の話なども聞いて回りました。

（多様さから感じたこと）

このような雑多な経験を通じて、人の生活には、実に様々なあり様があり、絶対的なものや標準的なものはないということを感じさせられています。

各国外交官が出席する大使館主催の華やかなレセプションも、一握りの有志が集まった

社会的取り組みのための準備会も、それぞれの世界と背景を持っています。自分の常識の世界だけでなく異質な常識を受け入れ行動することの意味と難しさを実感できたのは、一つの財産かなと思っています。

その中で共通的に感じたことを、三つほどご紹介したいと思います。一つには個人の魅力、二つ目としてはその個人がつながっていくことの大切さ、そして三つ目は現場が基本ということです。

（個人の魅力）

一つ目の個人の魅力について言えば、多種多様な場所で多種多様な人種や職業や分野や立場の方々と横断的に出会いしていると、人の魅力の共通性を感じるようになります。

それは、青さであったり優しさであったり柔らかさであったりするような気がします。素直さや伸びやかさとも言えるかも知れません。また、自分の限界を知る謙虚さでもあるように思います。日産自動車のゴーン社長は、「私は実践的な人間だ。自分がいつ失敗してもおかしくないことを知っている。だから、傲慢さが非常に嫌いだ。どんな企業にとっても、最も大きな危険の一つは傲慢さだと思う。」と発言されていますが、これは幅広く当てはまる話だと思います。

もちろん、単に人が良いだけでは仕方がなく、プレッシャーがかかった時に腰が砕けたり言い訳したりしないというのは当然です。その上での人の魅力と言えるかもしれません。

中にはもっと短絡的・効率的に成果を出そうとする人もいますし、実像以上に自分を大きく見せようとする人もいます。あるいは、過去の蓄積に満足し、他人を否定することによって現在のバランスを取っている人もいます。この点については、環境によっての大きな違いはないようです。ただ、人材が都会ほど豊富でない地方では、他人の否定ではなく、多様な人々を巻き込んでいく努力が大切だと感じています。

（人のつながり）

二つ目の人のつながりは、個人の力が生きる環境づくりと連携という意味です。

良い仕事をしている人たちの共通性について考えると、みずから道を切り拓いていく力と多くの人を引き込む力といったものではないかと思います。

自分が経験したことのないこと、今まで誰もやったことがないこと、そんな仕事をする際には、専門的な力とともに、未来への夢や社会への使命感（ちょっと大げさですが）といった方向性と動機付けを持ち、現状に対しての疑問を感じ問いかけをする力と素直に悩む柔らかさが求められます。孤独に耐える強さも基本にあるように感じます。最初は多く

の人が賛成してくれても、難しい局面になると最後は自分一人で頑張らなければならない時期が来ることを知っています。

だからこそ、そのような人は人のつながりの大切さを感じており、自分の力だけでなく周りの人たちを引き込んでいくために、自分自身が肩の力を抜いて明るく楽しくやっていく行動様式が体に染み込んでいるようです。そうでなければ必要な情報や助言などが集まってこないし、自分の実力以上のことができないからです。自分の力だけでできる範囲のことをしている人は、他人を否定し自分を主張しても通用しますが、それでは自分の能力以上のことは生まれません。

本当に実力のある人は、自分の力の限界を知っているが故に、人の力をつないでいくことの大切さも知っているように感じます。この点で、「自分がやった！」というのではなく「自分がやった訳ではないが自分がいなければ生まれなかった。」という仕事がいいなと思っています。

（現場原点）

三点目の現場が基本という点については、私自身が倒産しない組織で長年働いているということが影響しているかもしれません。

民間企業（といってもいろいろありますが）とは違って、倒産しない世界では、実際の結果よりも理屈の方が優先されてしまうことがあり得ます。思い込みの強い人が声高に主張した筋の悪い仕事を、組織として仕方なく無理やり体裁だけ整えるということが起きかねません。

しかしながら、理屈は99%正しくても、最後の1%で人の信頼や共感を勝ち取ることができないと実際には物事は動きません。徳川家康が「百里の道は九十九里をもって半ばとす」と言ったという所以かと思います。すなわち、現場の必然性に基づかない大言壮語ではなく、客観的に人の力を結び付けていくことが大切であり、そのためには現場で実際に起きる結果を誠実に直視する必要があるように思います。そして、水が自然に流れるような現場の道筋を読む必要があるように感じています。

（機微とチャンス）

これら三点と密接に関わりますが、人の心の機微とチャンスへの感性の大切さも強く感じたことです。

特にチャンスについては、雑多な経験を通じて、チャンス、タイミング、流れへの反応がどれだけ大切で実際の運不運を左右するかを痛感しています。このため、チャンスには

好き嫌いせずに食いついてしまうようになったという点では、「雑職性」は「雑食性」につながるのかもしれませんが。

（大学での経験）

私は現在、大学情報サービス室で社会連携の仕事をしています。

これは、これまでの教員個人を主体とした大学の活動に加えて、広島大学という看板の下に、「学内横断的な連携により社会との組織的・継続的な活動をしていく」可能性を開拓していくという仕事です。いわば大学という社会的存在について、社会の中での新たな可能性を模索しようとするものです。

これまで、マツダ財団と連携しての子ども科学わくわくプロジェクトや地域の経済団体などとの産業振興ビジョンづくり、障害のある人たちの作業所の支援プログラムの研究など、いろいろなことに取り組んでいます。

国からの補助金に頼るだけでなく、地域の力を引き出し新たな価値を生み出していきたいと考えています。

（応援と励ましの社会システムづくり）

個人的にも、ある国立研究所の依頼で精神障害のある人の社会復帰支援システムの研究に関わるなど、多様な分野に首を突っ込んでいます。社会の効率性、発展の中で影の部分に押しやられた分野で実に粘り強く頑張っておられる方々にもお会いできました。北風に向かっている歯を食いしばって頑張らざるを得ないこともあります。できればもう少し周囲からの理解と評価と応援があって、柔らかく取り組んでいける環境があればいいなと思っています。

社会のために何かしようとする人が気軽に参加でき、時には一息つける仕組みづくりが必要だと感じています。私はこれを「長距離バスにトイレを付ける」という言い方をしています。長距離バスでも、中にトイレがあると思うと気軽に安心して乗れるということです。以前、障害者医療推進歯科医の制度づくりに関わった時にも、手に余る時にはいつでも応援を頼める仕組みづくりに力を入れました。

（「ひろしま」と広島大学）

海外でも雑多な経験をしてきた中で、「ひろしま」には格別の思いがあります。

世界の中での知名度は高く、期待も大きいのではないかと思います。その中で最近考えているのは、「ひろしま」には、人類の悲惨さの極を経験した地として、人類のありたい社会の姿の実現に他に先がけて取り組み実証していく責務があるのではないかと、ということ

です。核兵器の無い、戦争の無いという否定条件だけではなく、より創造的に、社会のすべての人々がそれぞれに伸びやかに生きていくことのできる社会づくりに取り組み、その成果を世界に示していくべきではないかと思うのです。

障害のある人や女性、外国人などの平等な社会参加、ユニバーサルデザイン、環境対応、災害対策、健康づくりなど色々取り組むべき課題は多く、総合大学としての広島大学ならではの、地域とともに実践的に取り組んでいけることがありそうです。

広島大学が掲げる平和は、観念としての平和ではなく、悲惨さと廃墟を経験した地からの、人類のありたい社会の姿とそれへの道筋の提言と実践であるべきではないかと感じています。